



揺籃（ようらん）とは「ゆりかご」のことです。本校の校歌の一節に「霊の揺籃 わが母校」とあります。中条校は、生徒の皆さんにとって精神（魂）をすこやかに育む「ゆりかご」でありたいと思っています。

■地域交流 真っ盛り



“中条地区球技大会”参加
ソフトバレー&マレットゴルフ



“中条でカブトムシをとろう”
スタッフとして参加

＜地域交流その1＞7月17日（日）、中条地区恒例の球技大会が行われました。例年、この球技大会に中条校の生徒も参加をさせていただいています。昨年はソフトボールとソフトバレーの2種目に参加し、結果は共に準優勝でした。今年は、少し種目を変えて、マレットゴルフとソフトバレーの2種目に参加をさせていただきました。中条地区の皆様の技術と迫りに圧倒された球技大会となりました。来年は中条校も気合いを入れて参加させていただきます。

＜地域交流その2＞翌日7月18日（月），“道の駅中条”の裏山において、毎年恒例のイベント「中条でカブトムシをとろう」が行われました。中条校からは3名の生徒がスタッフとして参加しました。山道を登ってきた子どもたちが木につかまっているカブトムシを見つけると「ワーッ、いるよいる！」と歓声をあげ、興奮しながらカブトムシを捕まえている姿が印象的でした。当日は約300組、合計約900名の方々がこのイベントに参加されました。イベント終了後には、スタッフの慰労会にもちゃっかり参加させていただきおいしい焼き肉をいただきました。

■「西山地域の近現代史-西部農学校の歩み」 ～大日方悦夫先生から学ぶ その1～

6月13日と20日の2回に分けて、大日方悦夫先生から、「西山地域の近現代史-西部農学校の歩み」について学びました。今回は大日方先生のお話の中から、中条校の前身である西部農学校の開校について概要をお伝えします。

西部農学校ができたのが1908年（明治41年）。7つの村がお金を出し合って、西部農学校を作った。当時7村の人口が27,870人。今、小川村は2,900人だが当時は1万人を少し欠ける程度だった。

なぜ、村の人たちが学校を作ろうとしたのか、それはここが江戸時代から勉強に熱心だったからだ。それは寺子屋の数が多かったからだ。寺子屋は今の塾だった。子どもは6歳になると塾に通い、読み書きと算を学んだ。5・6年通い、社会に出た。寺子屋の先生が亡くなると、教え子が先生へお礼に記念碑を建てた。これが筆塚だ。寺子屋に通う子どもは習字を習うから筆子といった。筆塚がこの地域にはたくさんある。土地がやせているだけに、勉強を一生懸命やろうという気持ちがあった。この気持ちは信濃の国全体が熱心だった。

農業や商業、工業のようにすぐに役立つ学問を実学という。国語とか社会のようにすぐに役にたたない学問を虚学という。農業は、肥料、作物の葉のつき方、苗を植える穴のあけ方などを学ば、その日から使える。全国的にこれを教える学校が必要になった。この地域でも、学校が必要になり、学校作りが始まる。

明治42年（1909年）4月13日に、上水内郡組合立西部農学校が開校した。7つの村がお金を出して学校組合を作り、学校を開校した。だから組合立という。（講話概要文責1坪井）

■イベント“中条でカブトムシをとろう”
開催に向け、森林整備を行いました！

7月18日（海の日），“中条道の駅”の裏山で行われるイベント“中条でカブトムシをとろう”に向けて、一年生が森林整備作業を行いました。現場での作業は、①遊歩道に木片チップを敷く。②草刈りを行う。の2つでした。カブトムシを楽しみにやって来る小さな子どもたちのために、一生懸命作業を行いました。暑い中での作業となりましたが、中条支所の方々に用意していただいたお茶とプラムが最高においしく感じた一日となりました。



■高校総体“北信越大会 水泳競技会”
応援ありがとうございました！

7月22日・23日、長野市のアクアウィングで北信越水泳競技大会が行われました。中条校からは、県大会で200mバタフライ優勝、100mバタフライ6位入賞を果たした松澤匠真くんが出場しました。当日は校友会、生徒、保護者の方も応援にかけつけてくださり、熱い声援を送ってくださいました。結果は全国大会出場とはなりませんでしたが、北信越の強豪選手が集う中、長野県選手団の一人として戦う匠真くんの姿に勇気と希望をもらいました。小学校時代に始めた水泳をここまで続けてきたこと、また3年間自転車の中条校まで通い続けた匠真くんの強い気持ちにも拍手を送ります。応援ありがとうございました。

